

天の岩戸、戸隠に落ちる

平家物語・節用集・庭訓往来註・庭訓往来抄

天の岩戸が戸隠に落ちてきたという伝承が現れる最初の文献は今のところ『平家物語』（百二十句本）かと思われる。

水原一氏が校注して新潮日本古典集成に収めた国会図書館蔵の『平家物語』百二十句本を荒山慶一氏が入力してネットに公開しているが、「第百九句 鏡の沙汰」に次のような箇所がある。

昔（むかし）天照大神（てんせうだいじん）、天（あま）の岩戸（いはと）を閉ぢて、天下（てんが）暗闇とならせましませし時（とき）、よろづの神（かみ）達（たち）集（あつま）つて、こはいかがすべきとて、はかりごとを思（おも）ひまうけ、榊（さかき）の御四手をささげ、御神楽（みかぐら）を奏し給（たま）ひしかば、天照大神（てんせうだいじん）、岩戸（いはと）を細目に開（ひら）かせ給（たま）ひ

て、御覽（ごらん）ぜられし時（とき）、世の中少し明（あけ）になりて、集（あつま）らせ給（たま）ひける神々の御顔（おんかほ）の白々として見えければ、岩戸（いはと）のうちより面（おも）白しと宣（のたま）ひける。おもしろしと言ふ言葉は、それよりしてぞ始まりける。天照大神（てんせうだいじん）岩戸（いはと）より御目を少し出ださせ給（たま）ふを、集（あつ）まられける神（かみ）達（たち）の、あな目出たやといさまれければ、それよりこそ悦（よろこ）びの言葉を、めでたしとは申すなれ。その時（とき）手力雄命（たぢからをのみこと）と言ふ大力（だいぢから）の神有りしが、えい声（ごゑ）をあげて、岩戸（いはと）をひき開（ひら）き、扉をひきちぎつて、虚空へ遠く投げられける程（ほど）に、信濃国（しなののくに）に落ち着きぬ。戸隠（みやうじん）の明神（みやうじん）是（これ）なり。

百二十句本の成立時期を何時とするかは甚だ難儀なことで、中世とでもいつて逃げておくが、この語源付き岩戸開きの神話をより広く流布させたものに『節用集』が

ある。

文明六年（1474）以前と今少し年代を限れるが、『古辞書大系』に収められた影印『節用集』（文明本）に次のようにある。

## 目出度

（以下割書）

シユツ タビ  
イダス ハカル

倭語也。目出<sup>ト</sup>者言ハ昔<sup>シ</sup>天照大神與<sup>ニ</sup>素盞烏命<sup>一</sup>争<sup>玉フ</sup>天下<sup>ヲ</sup>一時天照大神引<sup>ニ</sup>籠<sup>玉フ</sup>岩戸<sup>ニ</sup>之間天下七日七夜<sup>クラヤミ</sup>暗也。此時諸神相談<sup>シテ</sup>於<sup>テ</sup>岩戸<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>為<sup>シ</sup>万ノ神樂<sup>ヲ</sup>給<sup>ナ</sup>時。天照大神面白思食<sup>ト</sup>戸<sup>ヲ</sup>少開<sup>キ</sup>有<sup>ニ</sup>御覽<sup>一</sup>其時見<sup>ニ</sup>大神ノ御目<sup>ノ</sup>出<sup>ル</sup>諸神喜<sup>テ</sup>目出<sup>ト</sup>給<sup>フ</sup>自<sup>レ</sup>是始也。其時太刀雄尊取<sup>テ</sup>岩戸<sup>ヲ</sup>抛<sup>レ</sup>空<sup>ニ</sup>自<sup>レ</sup>是天下明也。其ノ戸落<sup>ニ</sup>信州戸隱<sup>ト</sup>也。故<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>戸隱<sup>ト</sup>太刀雄<sup>ハ</sup>今ノ常州志津ノ明神是也。

『平家物語』から「目出」の語源説と岩戸が戸隱に落ちたことが踏襲されている。ただ、『平家物語』では岩戸を戸隱の明神としていたが、これが除かれて「太刀雄<sup>ハ</sup>

今ノ常州志津ノ明神是也」が加えられている。

なお、「太刀雄」と読むか「太力雄」と判読するかは微妙だが「太刀雄」に「タチヲ」と仮名を振っているので「太刀雄」としておく。

『節用集』は辞書であるからこの伝承を流布する力は大きかったと思われるが、さらにこの伝承を広めるのに寄与したのは初級教科書といわれる『庭訓往来』であろう。

謙堂文庫蔵で室町時代後期の写本かといわれ、『往来物大系』に収められた『庭訓往来』の註である『庭訓往来註』に次のようにある。

改年ノ吉慶被<sub>レ</sub>任ニ御意ニ一之条先<sub>一</sub>以<sub>テ</sub>目出度覚候（以下割書）

歌道<sub>ニハ</sub>改年<sub>ヲ</sub>全<sub>全</sub>ト読也。目出<sub>トハ</sub>言<sub>ハ</sub>昔天照大神与<sub>ニ</sub>素盞烏命

ト一争<sub>ニ</sub>天<sub>一</sub>下<sub>ヲ</sub>一時天照大神ハ岩戸<sub>ニ</sub>引籠給之間天下七日七夜成<sub>レ</sub>暗<sub>ト</sub>也此時諸神相談<sub>シテ</sub>於<sub>ニ</sub>岩戸ノ前<sub>ニ</sub>一<sub>一</sub>万ノ神樂<sub>ヲ</sub>為<sub>一</sub>給時

天照大神面白思食戸<sub>ヲ</sub>少<sub>シ</sub>開御覽有<sub>ル</sub>其時太神ノ御目ノ出<sub>ヲ</sub>見諸

神喜<sub>コヒ</sub>目出<sub>ト</sub>給<sub>マフ</sub>自<sub>レ</sub>是始也其時太力雄尊取<sub>ニ</sub>岩戸<sub>ヲ</sub>一抛<sub>レ</sub>空<sub>ニ</sub>

自<sup>レ</sup>是天下明也其戸信州戸隱<sup>ニ</sup>落也故<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>戸隱<sup>ト</sup>一<sup>一</sup>太力雄<sup>ハ</sup>今  
ノ常弼志津ノ明神是<sup>レ</sup>也

『節用集』の割書の最初に「倭語也」とあり、『庭訓往  
来註』はその代わりに「歌道<sup>ニハ</sup>改年<sup>ヲ</sup>全<sup>ク</sup>全<sup>ク</sup>讀<sup>ム</sup>也」とある  
以外は、語順などに少しの異なりがあるとはいえ、両者  
は同文である。文書の性格からすれば『庭訓往来註』が  
『節用集』を借用したのであろうが、辞書と教科書の注  
釈に載せられては、岩戸と戸隱の結びつきは世間周知の  
こととなったと思われる。

なお、岩戸開きの伝承に語源説話を付すのは平安期の  
『先代先代旧事本紀』が最初と思われ、『平家物語』の  
「面白」も『先代旧事本紀』にあるが目出はなく、『平  
家物語』が加えた「目出」が『節用集』や『庭訓往来』  
に伝わったと思われる。

同様のものに『庭訓往来抄』があるが、ほぼ同文である。